

# 地区だより

VOL 6 1989.1.27  
発行 西湘放射線技師会

新春を迎え皆様には益々ご健勝のことと御慶び申し上げます。  
昨年は会の運営につきまして種々ご支援、ご協力をいただき心から厚く御礼を申し上げます。

1985年にX線が発見されて90年余りになりますが、最近の10年、放射線診断装置（CTにはじまりMRI）等、その急速な進歩には誠に目を見張るものがあります。今後も更にコンピューターを駆使した医学診療診断機器が発展してゆくものと思われませんが、それにしても21世紀に向けて医学がどのように展開されて行くのか想像も出来ません。しかし、恐らく現在の医学、医療体系が大きく変化するような事はないだろうと思います。総合画像診断の時代と言っても、われわれ市中病院にこれらのシステムが導入されるには多くの問題があり相当の日時を要する事は確かです。

まずは現実の放射線科をより充実したものとする努力が先決ではないでしょうか。われわれの努力が医療の現場で信頼され、技師の存在価値が大きく認められることによって身分の保証もなされる訳で、その為には人間的にも、技術的にも日々の研鑽が必要でしょう。

幸いなことに技師会では新しい時代に対応するために全国統一講習会の実施を決定し、既に一部で施行を実施されている県もあります。会員一人ひとりが実りある社会生活を送るために、また放射線技師としての責務を充分果たし、医療社会から信頼される技師となるためにもまたとない機会ではないかと思ひます。全員がこれに参加出来ますことを願っております。

さて茲に平成元年を迎えるに当って、静かに自己反省をし、この歴史の一頁を人生の新たな出発点として考えて見たいと思ひます。

『法句経』

「おのれこそ、おのれによるべ、  
おのれを措きて、誰によるべぞ、  
よくととのえしおのれこそ、  
まことえがたきよるべをぞえん」

とあります、人間にとっては「おのれこそおのれによるべ」なのであります。何はさておいても、人間は自分を知らなければならない。自分を知らなければ、自我を滅しえず、頑迷、独断の眠りから醒めることが出来ません。医療人として、特におのれを知ることの大切さを痛感しております。独断ではいけません自分の周囲には、同じ相手がいるのです。病める人の心を知り、対話の出来る豊かな人間性は、この自己反省から生まれるのではないのでしょうか。一日一時を大事に生きたい、そんな願いをこめ、平成元年が皆様にとってすばらしい年になりますよう祈って年頭の挨拶といたします。

西湘放射線技師会会長 水沢 良隆

## — 病院紹介 —

### 小林病院

一昨年3月に着工してより1年半、昭和63年9月に新築本館が落成し、即、全職員総力を挙げて二日間で移転を完了、又、旧館に関しても昨年末をもって改築工事も完成して病院の全容が整った所です。

近年、急速な医療技術の進歩と保険医療制度の普及は、医療のあり方そのものに大きな変革を迫りつつあります。今日ほど、将来への展望が困難な時代がかつてあったでしょうか近代化に伴う膨大な設備負担が病院経営の上に重圧となつてのしかかつて来ているのが現実です。加うるに癌やエイズ、医療訴訟、告知問題、最先端医療技術の開発に伴う医師、技術者、患者間の信頼感が新たな社会問題としてクローズアップされ、新しい医の倫理の確立が時代の要請となつて来ている現在、当小林病院は、県下で古さではNo.2の私立の病院ですが、創立80周年を丁度、昨年9月の落成式に迎えられた事は明日への飛躍に、更にはずみを付ける事となりました。少々病院の足跡をたどると、

初代院長	小林 欽企	明治42年	小田原市内で開院
二代院長	小林 軍二	大正12年	病院として認可される
三代院長	小林 企一	昭和12年	看護婦学校創設
四代院長(現在)	小林 泉	昭和28年4月	私立としては全国で2番目の小田原准看護学院に改組、すでに723人の看護婦を世に送り出しており、併設の学院を有する関係から放射線科としても実習に講義にと教育に當っております。

幸い、第二次大戦の被害を被ることなく昭和26年2月に医療法人に改組、各自治体にさがけて救急車を導入、救急患者の輸送を開始、昭和39年8月救急指定を受けました。需用増加に応じて昭和35年本館、昭和46年に病棟を増築ベッド数150床、職員120名を擁するに至り、昭和63年9月に完成した本館には8階に患者食堂を設け、同じフロアに調理室を併せて栄養士が直接患者さんに接する事が容易になり、心理的側面にも配慮されております。

病院の規模は  
地下1階、地上8階建(本館)・地下1階、地上5階建(旧館)  
敷地面積 2,223.59m<sup>2</sup>  
建築面積 654.34m<sup>2</sup>(本館) 493.00m<sup>2</sup>(旧館)計 1,147.34m<sup>2</sup>  
建築床面積 5,652.81m<sup>2</sup>(本館) 2,885.76m<sup>2</sup>(旧館)計 8,538.57m<sup>2</sup>  
ベッド数 185床

放射線科の規模は現在、技師2名、助手(看護学生)1名で勿論、手不足は承知ですが4月には増員すべく考えている所です。

設備は昭和53年西湘地区の病院に先駆けてCTを導入、昭和63年11月に3台目として全身用CTを稼働させました。全身用CTに関しては全くの後発となり日夜奮闘しております。

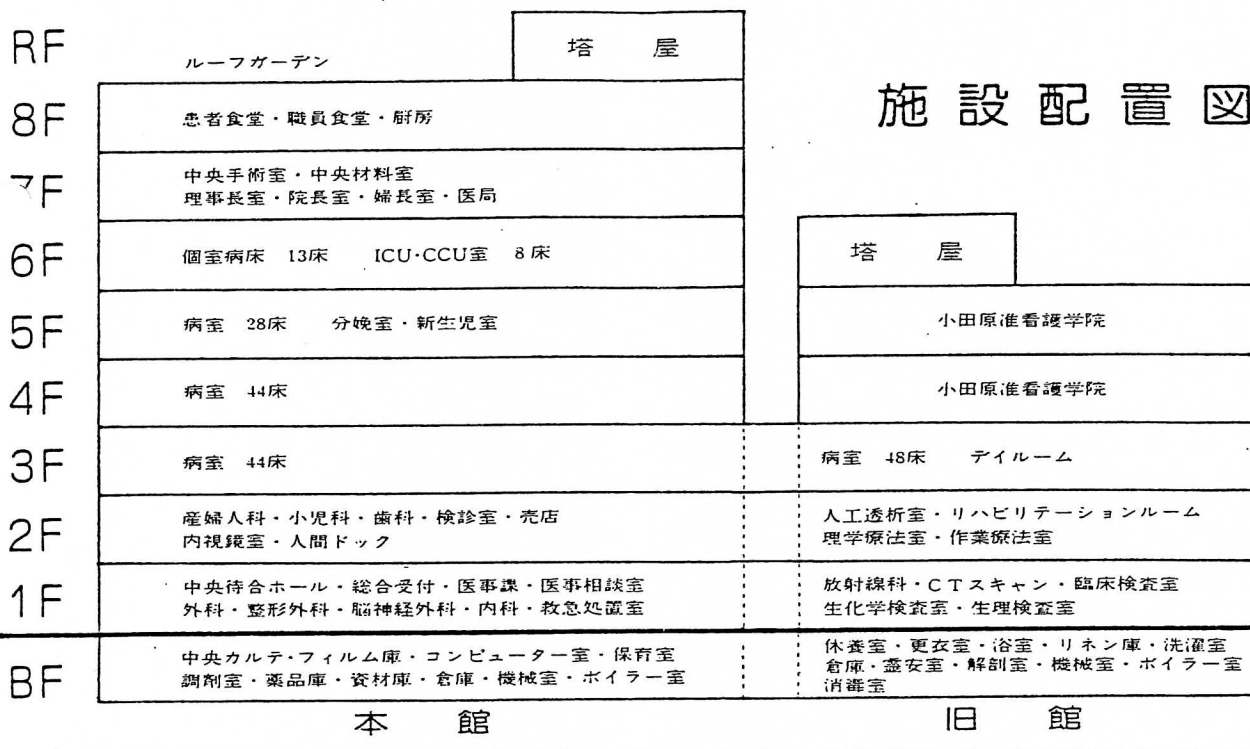
放射線科の規模は現在、技師2名、助手(看護学生)1名で勿論、手不足は承知ですが4月には増員すべく考えている所です。

設備は昭和53年西湘地区の病院に先駆けてCTを導入、昭和63年11月に3台目として全身用CTを稼働させました。全身用CTに関しては全くの後発となり日夜奮闘しております。

○CT 島津	SCT-300TC	○消化管用透視台	島津	ZS-11
○断層撮影用	島津 HL-5型	○外科用イメージ	島津	AD100P-2型
○一般撮影用(天井走行)	アコマ	150kvp	500mA	2
○間接撮影用	アコマ	100kvp	1uF	1
○診断用ポータブル 自走型	アコマ	100kvp	1uF	1
○診断用 乳線用	アコマ	47kvp	100mA	1
○透視診断用(メッシュ) OP室	アコマ	100kvp	100mA	1
○歯科用パノラマ	吉田工業	70kvp	6mA	1
○歯科用REX-N	吉田工業	60kvp	10mA	1

以上12台の装置を駆使して業務を行っており、旧館の改築も完了した今、放射線科のテリトリーも大きくなった分動く距離も増加し、近い将来定員の増加はやむをえない所かと思われます。

小林病院 放射線科技師長 中静 恒



■訪問記■

小林病院はS.53年県西部一番を切ってCTが設置された草分け的存在として私達の印象は強い。当時“CTとは一体どんな怪物なんや”と目と耳で精一杯知識を吸収して帰ったあの頃の勉強会が懐かしい。今まで私達が病院施設を利用させて戴き深く感謝申し上げます。今回、土曜日昼前モダンな正面玄関から入り外来ロビーは満員も整備されシック調で安心感を覚えつつ奥の放射線科を訪れた。手前は既設のXTV、一般室、新設の受付を挟んで奥にゆとりのCT室、操作兼技師室、アンギオ予備室が全容である。次に中静技師長の案内で新館を上から見て回った。8Fは全フロアーが絶景の食堂、順次階下へ手術室天井式Cイメージ装置、病棟各階共Nsを囲む円形通路と5FのPota格納庫、2F集検フロアー間接XP室、歯科フロアー専用XP室、地下のフィルム等保管フロアーが広域レール方式、見事の一語！見学中、各病棟の看護婦さん他職員の皆さん明るい笑顔を有難うございました。(山田)

# 『今、自分に何ができるか！』

平成元年1月8日

神奈川県放射線技師会 理事

地区委員長

閑野 政 則

昭和から平成へ、時代は大きな節目を迎えている。この年に当たり稿を受けた事に心より感謝申し上げます。又同時に西湘放射線技師会が日頃地区活動に積極的にとり組んでいることに地区委員長として厚く御礼申し上げます。

私も、30年近く放射線技師を職業として公私共に生活をしていますが、将来に向かって自分は何を目標にこの職業を糧として生きているのだろうか？と時々考えさせられます。

時代は多様化し又高度化しております。私が30年前に群馬大学に就職した時はバット現像タンク現像を1日 500枚位し、白衣は黄衣に、手の指はピンク色から現像液の色に変わり体は定着液の臭いが染み込み“すしや”さんと間違えられました。でも暗室係は一番良かったです。透視係は大変です。偉い先生が腹をだし暗室メガネを掛け“閑野、透視を始めろ”の一言、肉体労働の始まりです。透視台は“手動式”ですから想像して下さい！

冬はともあれ夏の暑いときにも暗幕を閉め、含鉛ゴムのプロテクターを着用して台の起倒をします。立位から水平位にするためにハンドルを77回まわしました。これの反復ですから技師と言っても、アフリカからアメリカ大陸に連れていかれた“クンタキンケ”の奴隷です。このときの研究は肉体労働から解放されたいと思う研究でした。

今ではどうでしょうか。撮影枚数は医科では年間約3億8千万枚、歯科では同約1億枚と言われておりますが、CR, CT, RI, US, さらにはMRと機器も大きく変わり、“頭と心”の時代です。社会も国際化し情報化し又一方では高齢化しております。この様なときに我々は今、何を成すべきか考える必要が有ろうかと思えます。肉体労働からパラメディカルと今では我々が作り上げた機器によりチーム医療として大きく成長され、病める患者さんの為に努力している職業に高い誇りを持たねばなりません。しかし、高齢化して行く医療の中で高い人格を持って対応している放射線技師は何人いるのでしょうか？

小林教授（前信州大学放射線科）と中村日放技会長との対談で“君が言っているような技師諸君は3分の1しかないよ”と言われ深く反省した事を思い浮かべます。

我々の職業も医療の中では先生と言われる程立派に又重要な職業に成長されました。しかし、社会人として先生と呼ばれる人格に成長したでしょうか。何か自分の職業に社会人としての誇りに欠けているように思えます。それぞれの立場として努力されている事は認めますが、今こそ高い視野に立って放射線技師の将来を見つめる“頭と心”が必要です

日本放射線技師会、神奈川県放射線技師会も大きな方針を打ち出し社会に於ける我々の職業を確立しようと努力しております。その為には4年生大学が1校でも早くできる事が必要であり、高度化して行く医療の中で真に先生と呼ばれる高い知識と人格が必要な事は誰もが言われなくても分かっていると確信しております。

地区活動に於いても高い視野に立ってこれから将来放射線技師を職業として行く為には神奈川県放射線技師会、中長期将来計画委員会報告を一読され、自分ができる事は何かを見出だす事を切にお願いしたい。

□地区委員より報告□

今回は地区だより発刊が年初に当たり、従来の報告は割愛させて戴きました。  
そんな訳で県放技会誌 N097, N098の隅から隅までくまなく？熟読される事を希望します。  
その代わり県放技の為に尽力されておられる地区委員長 閑野先生にご投稿を予めお願い申し上げた所、心よく了承して戴き尚且つ締切日前にきちんと原稿を手にする事が出来ました。本当に有難うございました。（年初地区委員会は2月3日です。）

● 追悼

間中病院 放射線科に技師長として永きに亘り勤務されていた  
会員 五味川清治様は 去る昭和63年10月12日午前  
病氣加療の甲斐なく不帰の客と成られました。

在りし日の健やかなお姿を忍び

喪心よりご冥福をお祈り申し上げます

西湘放射線技師会

入会・退会欄

平成元年	4月入会予定	白鷗 病院	前 純夫
		林 病院	木戸 幾三郎
昭和63年	10月退会	間中 病院	五味川 清治
	12月 //	小田原市立病院	香取 みき

編集後記

昭和から平成へ、時代の大きなうねりの中で明けた平成元年、激動の昭和を経て平成はその名の通り、平和な時代が続いてほしいものです。

さて今年は、西湘放射線技師会役員の改選の年にあたり、私達のメンバーによる地区だより編集も最後となりました。素人ばかりの集まりで始めた編集作業も、回を重ねるごとに手際良くなり各編集者宅で一杯やりながら開いた編集会議も思い出深いものとなりました。誤字・脱字・稚拙な割付等をもものともせず、広い心でご愛読していただいた、会員の皆様には編集者一同深く御礼申し上げます。

地区だより編集者 山田 孝  
橋本 実  
小宮 邦雄  
徳安 俊二